

I—2 視覚性注意障害を有する事例に対する カレンダー利用の訓練について

○後藤 祐之¹⁾ 高瀬 健一¹⁾ 田谷 勝夫¹⁾

【はじめに】当センターでは、視覚性注意障害や方向の認知などの障害を有する事例に対する作業指導を行った。本事例は事務的な仕事への復職にあたって、文章や表の読みの困難が職業上の障害になると考えられたため、さまざまな場面で読みに対する援助の方法を検討した。このうち本研究では、予定管理に必須となる、カレンダーの読みに対する訓練について報告する。

【事例の概要】51歳、男性。1994年12月22日にも膜下出血を発症し、動脈瘤手術後にリハビリテーション目的でI病院に入院した。その後、1996年10月から1997年2月まで、当センターにて職業講習を受講した。受障前は営業本部長として、営業所の業績管理を行い、過去のデータを分析して営業戦略を立て、各営業所あての示達文を作成する業務等に従事しており、事務的な仕事での復職が想定された。

当センターでの受講開始時には、明らかな言語症状は認めず、三宅式記憶力検査では有関係10-10-10、無関係1-5-7、計算は加減乗除とも1桁は可能であったが、2桁は時間がかかった。顕著な構成障害が認められ、平面図・立体図の模写やWAIS-Rの積木模様の課題は遂行困難であった。構成失書を認め字形にまとまりを欠くことがあったほか、空間性失書のため、横書き文は斜め右下がりになるが、罫線が引かれた紙を使うことで改善することができた。線分二等分検査では中心点がやや右方に偏位し、左右同時に刺激を与えたときに、左側の無視が認められた。また、手指の認知や上下・左右の方向の認知を誤ることがあった。

さらに、視覚性注意障害を認め、視覚的な注意を向けることができる範囲がきわめて限定されていた。

【カレンダーの読みにおける問題点】表の読みには困難があることは、リハビリテーションを実施したI病院からの情報で予め判明していたため、表形式のカレンダーを使った訓練を計画した。

まず、どのようなカレンダーが使いやすいのかを本人と相談し、今週の行が赤枠で囲んであり、かつ今週の行の行頭に「今週」という手がかりを入れたものを作成して使用した（カレンダーI）。カレンダーIは各週ごとに赤枠と行頭の手がかりを付加するため、1ヶ月のカレンダーは、週数分の枚数のカレンダーによって構成した。

次に、このカレンダーを使って、「今日が1月6日とします。1月6日の週が今週となっているカレンダーを出して下さい。

- a. 今日は何曜日ですか。
- b. 来週の木曜日は何日ですか。
- c. 1月29日は何曜日ですか。
- d. きょうは何日で何曜日ですか。」

のような4つのタイプの質問を行い、回答の正答率と所要時間を測定した。

正答率はa, b, c, dの順に100%, 43%, 100%, 88%であり（図1）、正答試行における所要時間の中央値は同じく、1秒、49秒、10秒、4秒であった（図2）。このことから、bタイプの質問への正答率は他のタイプに比べて低く、しかも正答できた試行においても、回答に著しく時間を要していることが明らかになった。

bタイプの質問への回答過程の行動観察や内観報告から、

1) 障害者職業総合センター

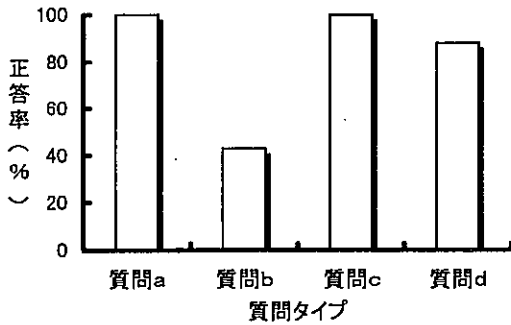


図1 質問タイプ別の正答率

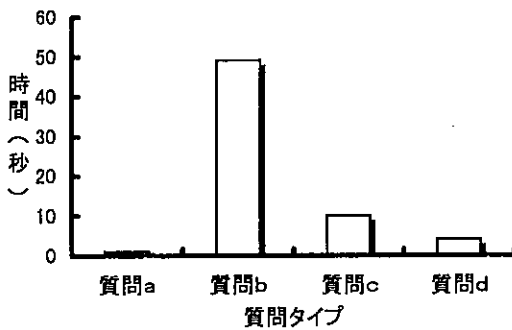


図2 正答試行における回答所要時間(中央値)

- ①行と列の交点を視覚的に求められない
- ②「来週」と問われているのに今週の行より上の行を捜すなど、週の時間的順序を表す表現を、カレンダーの平面空間上での方向に対応づけられない
- ③問われている行を正しく見つけた場合でも、左から右に行を指で追従するときに、指が行から逸脱することがある

という3点が遂行を阻害している要因と考えられた。

【方法】 行番地と列番地を指定し、指でなぞる方法で表読みの訓練を行った中村ら⁹⁾の報告を参考に、bタイプの質問について以下の手順で、訓練を実施した。週の時間的順序に関する手がかりとして、カレンダーIのすべての週について「先々週」「先週」「来週」「再来週」などの手がかりを付加し(カレンダーII, 図3), カレンダーを書見台に置いて、書見台の左端の縦の棧に定規を直角にあて週を特定することとした。そのうえ

	日	月	火	水	木	金	土
先々週				1	2	3	4
先週	5	6	7	8	9	10	11
今週	12	13	14	15	16	17	18
来週	19	20	21	22	23	24	25
再来週	26	27	28	29	30	31	

図3 カレンダー II

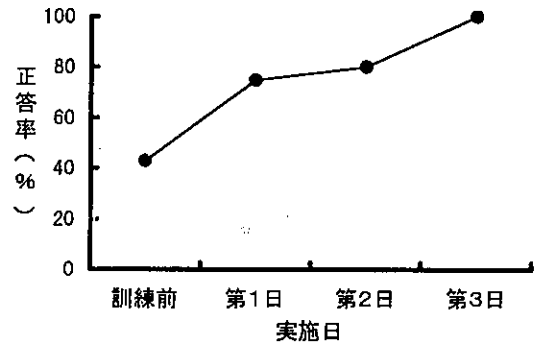


図4 bタイプ訓練における正答率の推移

で、行と列を指でなぞりながら日付を読みとることとした。

【結果】 訓練成績を図4及び図5に示した。カレンダーIによるbタイプの質問への正答率は43%、所要時間の中央値は49秒であったが、カレンダーIIを使用した訓練の初日で、正答率75%、所要時間中央値16秒、2日目で正答率80%、所要時間中央値11秒と成績は向上した。特に、カレンダーIIの使用により、質問されている週を迷うことなく見つけることができるようになった。しかし、書見台を使うことを忘れて、定規を書見台の左端の棧に直角にあてられずに、定規が傾くことによる誤答が生じ、正答率は100%には至らなかった。そこで、3日目は訓練を始める前に「気をつけるべき点は何ですか」と質問し、「定規がまっすぐになるように、定規を棧に当てる」という答えを得て、留意点を確認した上で訓練を実施した。その結果、すべての質問に正答することができた。

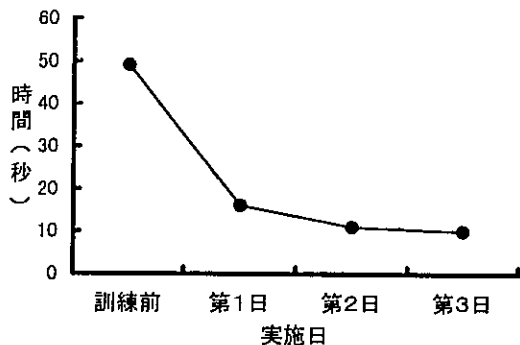


図5 bタイプ訓練における
回答所要時間の推移 (中央値)

【考察】 視覚性注意障害のカレンダーの読みへの影響はbタイプの課題で顕著に表れた。bタイプの課題は、カレンダー上の広範囲に視覚的な注意を同時に配分する必要があるため、視覚性注意障害を有する本事例にとって不利な課題であったと考えられた。一方、特定の日付を探したり、特定の日付の曜日を求める作業においては比較的良好な遂行成績を示しており、視覚性注意障害は著しい阻害要因にはならなかったと思われた。

定規を使って行を特定し、指でなぞりながら列との交点を求める手順は、視覚的な注意を向ける範囲を縮小することができる点で、本事例には適

した方法と考えられた。しかしその際に、「先々週」などの表現に対応した週を、カレンダー上で特定することができないことが手順の遂行を阻害すると思われた。

時間的順序を表す表現に応じた週を特定できなかったのは、方向の認知の障害が関与していると考えられ、「先々週」等の手がかりを行頭に付加し、方向の認知を不要にすることで解決することができた。この手がかりは、中村ら¹⁾における表の行番地と同等の機能を果たしていると考えられた。

【まとめ】 視覚性注意障害や方向の認知の障害を有する事例に、表形式のカレンダーを読むための訓練を実施した。週を示す手がかりを付加したカレンダーを使用し、定規で週を特定してから、曜日との交点を指でなぞって求める方法により、日付を正確に読むことが可能になった。

【文献】

- 1) 中村淳, 長谷川しのぶ, 長谷川恒雄, 遠藤邦彦: 視覚性注意障害による読みの障害に対するリハビリテーション. 認知リハビリテーション, 2 (1): 41-42, 1997.
(本発表は「職業リハビリテーション」第11巻に投稿した内容の一部である。)